アエラ 4/29号

マタニティ・ピンク

彼女がいると職場がうれしい

忙しい会社に、ゆったりとした妊婦がいる。成果主義もノルマも忘れ、気持ちがなごむ。優しくしたくなる。なんだか、まわりも幸せ。

編集部 平岡妙子 写真 篠塚陽子

黒い制服は、よく見ると、おなかのあたりがゆったりとしている。東京・有楽町西武の資生堂。化粧品売り場という美の最前線に、マタニティ美容部員がいた。

美容部員の美しさは、化粧品の売り上げにも影響を及ぼす。そこで堀井美智子さん(31)は、臨月直前のおなかを抱えながら、にこやかに、てきぱきと働いていた。銀座の激戦地という「戦場」だ。売り場のマネージャーとして、7人の美容部員をとりまとめていた。

いろんな姿という信頼

赤ちゃんができたことに気がついたとき、最初は、

「辞めるしかないなぁ」

と思ったという。働き続けるのは大変なこと、と思い込んでいたからだ。接客中につわりがきたらどうしよう。つらくて仕事に遅れたりしたら、店のみんなに迷惑をかける。あれこれ考えると、とても無理だと思った。退職することを、上司である東日本デパート営業本部・赤城憲一ゼネラルマネージャーに告げた。

でも、予想と違ってつわりもなかった。想像していた体がつらい状況というのも、やってこない。休みの日に一日中家にいるほうが、体調が悪くなり、気分が落ちこんだ。辞めると言ってしまったが、

「早まったかな」

と思い始めた。考えてみれば人生の3分の1以上、資生堂の美容部員として過ごしてきたのだ。だんだん、寂しい気持ちになってきた。

悩んでいたら、赤城さんから、

「仕事を続ける方向で、もう一度考えてみたら」

と持ちかけられた。

「やりたいです」

即答した。赤城さんは、パワフルな堀井さんが辞めるのは、もったいないと思っていた。子供を産んで戻ってきたら、人間的にも大きくなっているだろうという期待値もある。おなかの大きな美容部員が目立つ場所で働いていることに、赤城さんは、

「違和感はないですよ」

とあっさり言った。いろんな人が売り場で働いている姿が見えるほうが、信頼感を持ってもらえるのではないかと考えている。

マネージャーは売り上げに責任を負うため、プレッシャーもかかる。だが堀井さんは、3月の期末までやり遂げたいと希望した。最後まで、任せることにした。

そんなに仕事だけかな

大変だから、と役職から外すことは簡単だ。だが一番大事なのは、やる気を持って、生き生きと働いてもらうこと。接客商売は、働く人の雰囲気が売り上げを左右する。幸せな気分で働く人がいることは、客にも伝わっていく。

「妊娠すると顔もやさしくなるっていいますしね。お客様にも、ヒーリング効果があるかも」

と赤城さんは笑った。

妊娠して働く人に対して、社会の空気が変わってきているようだ。いままでは「妊娠したことで辞めさせられた」「最前線の現場から、はずされた」という事例が数多くあった。妊婦は「迷惑」という扱われ方だった。だがそんな会社は、減りつつあるようだ。

セイコーエプソン人事担当の神近千代美さん(28)は、妊娠したことを職場の人に告げると、驚くほどみんなに喜ばれた。上司の中村

セイコーエプソンの神近千代美さん。後輩の男性社員は、「怒ったりカリカリしたところは見たことがないですよ。このまんま、優しいお母さんになるのが目に浮かびそう」

昭喜さん(36)からは、

「仕事は誰かがいなくなっても回っていくものなんだから。体を第一にするんだよ」

と声をかけてもらった。その直後、神近さんは流産をしかかって、2カ月ほど入院した。そういう状況に対して、中村さんは、

「はっきり言って、しばらくは当てにせずにやるしかない。でも、迷惑っていう感じじゃないな」

と自然に受け入れている。突然休むというようなことがあると、

「だから女性は使えない」

「本当の戦力にならない」

という声が出てこないのだろうか。そう問いかけてみると、

「みんなそんなに仕事だけに生きている感じなのかなぁ」

と中村さんはつぶやいた。仕事第一主義の観点からではなく、もっと個人のライフスタイルを大事にする視点から、社員を見るようになってきているはずだという。

資生堂の堀井美智子さん。「おなかの子が活発に動くのがうれしい。一緒に頑張っているんだなって。つらいときも子供が癒してくれる感じ。穏やかな気持ちになれる」

「女性のほうが、古い考え方に縛られているかもしれないですね」

と中村さん。「あの先輩もやめた」とか「いままで育休を取った人がいない」とか、女性自身が周りの目を気にしているのではないか。迷惑がられるのはイヤだと、「自主規制」してきたようにも思えるという。

いつの間にか仲良し

神近さんが妊娠したことで、職場の同僚たちは、いい意味で気を使い合えた。力仕事はさせない。都合が悪そうだと、率先して神近さんの分も、仕事を終わらせておく。中村さんが、

「あの仕事どうなっているんだ」

と聞くと、ほかの人が、

「自分がやっておきました」

と答えることも。仕事を割り振るように指示を出しておかなくても、みんなでカバーし合っていたということもあった。神近さんが妊娠したことで、

「いつの間にか、チームワークが出来てきましたね」

という。不思議な効果があった。同僚の男性(24)も、

「なんかこっちも幸せな気持ちになりますからね。自然に助けているっていう感じでしょうか」

と優しい。書類の位置や仕事の進行状況なども、前よりわかりやすくなった。何かが起きたときに備えることで、業務の整理が双方向になり、みんなで共有できるようになった。気にかけ合うことで、雰囲気が良くなった。

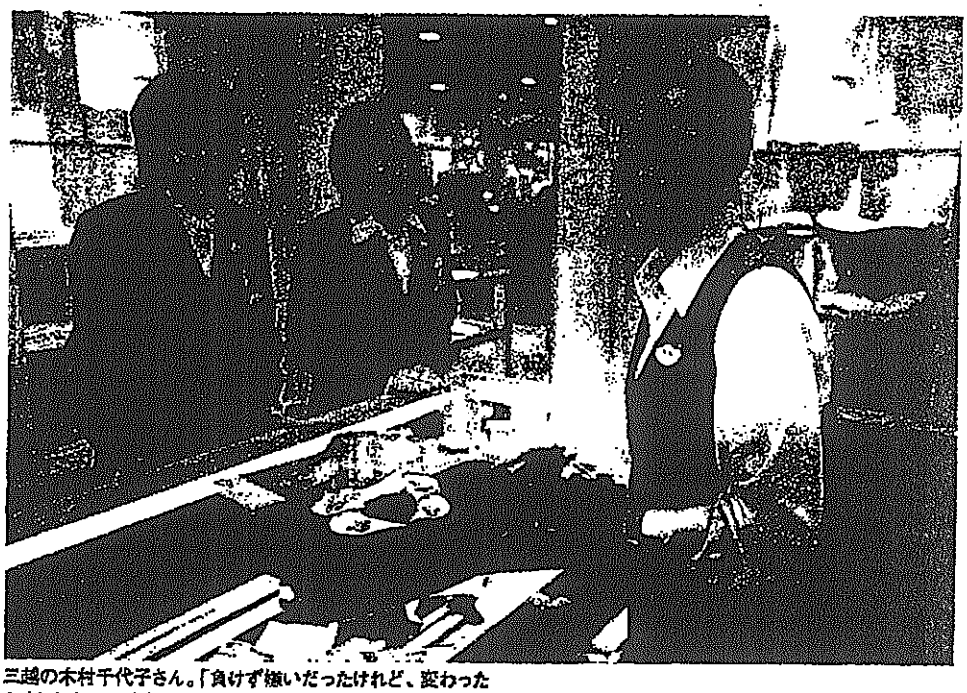
同社は、前例がたくさんあることも大きい。2000年度には26人が育休を取得している。そのうち2人は男性だ。

中村さんも、子どもが熱を出して休んだことがある。男性社員が育児で休むことに、抵抗感を感じる雰囲気はないようだ。妊婦に優しい会社というのは、誰もが働きやすい会社になっているのかもしれない。神近さんはいま、穏やかな気持ちだ。

「無理をしない時期があってもいいのかなと思えるようになった」

損したかと思ったけど

三越日本橋本店に勤める木村千代子さん(32)はいつも走っているみたいと言われるほど、タッタカと速く歩いていた。2年前、三越オリジナルブランドを扱う売り場の責任者「ショップマスター」に抜擢された。仕入れから商品の企



三越の木村千代子さん。「負けず嫌いだったけれど、変わったかもしれないですね。割り切って、ちょっとラクになった。自分の世界が広がっていくのが、楽しいですね」